

「健康長寿社会をめざして—核医学の挑戦—」

伊藤 健吾

第56回日本核医学会学術総会の会長を務めさせていただくことになりました。会期は2016年11月3日（木）～11月5日（土）の3日間で会場は名古屋国際会議場です。この学会の名古屋での開催は43年ぶり、前回は名古屋大学医学部放射線医学講座の初代教授高橋信次先生が、1973年8月27日（月）～29日（水）に開催されています。偉大な先輩の足元にも及びませんが、久しぶりの名古屋での学会を何とか成功裏に終えたいと思っております。

原稿執筆時点の9月中旬は学会開催まで残すところ1か月余で、プログラム集・抄録集の最終校正、外国人招待者の日程調整、学会に合わせて開催される関連会議の確認、会員懇親会、会長招宴などソーシャルイベントのうち合わせでてんやわんやの状況です。今回は、国立長寿医療研究センターという小さな所帯での開催となりましたので、藤田保健衛生大学の外山 宏教授と名古屋大学の加藤克彦教授に副会長をお願いし、大変なご尽力をいただいています。また、国立長寿医療研究センターの加藤隆司先生には、実行委員長として開催準備に奔走してもらう毎日です。

以下の文章は、学会の概要をお知らせするために会長挨拶として抄録集に載せた文章から一部抜粋したものです。

“本総会のテーマは、「健康長寿社会をめざして—核医学の挑戦—」とさせていただきます。日本は、世界に先駆けて超高齢化社会をむかえつつあります。その中であって求められているのは、世界最先端の医療技術・サービスを実現し、健康寿命世界一を達成することです。そのためには、新しい診断と治療の方法をたゆまず開発して普及させることが必要です。さらには、日本を課題解決先進国として、超高齢化社会を乗り越えるモデルを世界に拡げていくことが望まれています。

核医学では、放射性薬剤を用いて、検査や治療を行います。放射性薬剤は、生体や病巣の機能に応じて集積するため、形態画像では得られない診断情報をえることができます。また、特定の疾患部やがん病巣に集積することから、放射線治療として、放射線の影響が及ぶ範囲を限定することができます。このた

め、比較的侵襲で、高齢者にとって負担の少ない医療が可能です。そのユニークな特徴で、診断や治療、さらに創薬のプロセスをこれまで変えてきました。核医学への期待はますます高まっています。

本総会は国立長寿医療研究センター、藤田保健衛生大学、名古屋大学が共同で開催の任にあたり、併催される第36回日本核医学技術学会総会学術大会の事務局、全国の方々と協力して、国内及び海外、特にアジアから2,000名をこえる参加者を目標に、準備を鋭意進めてきました。

本総会のテーマを踏まえたうえで、核医学診断、RI 内用療法、分子イメージング、装置および薬剤開発など核医学全般にわたる領域の招待講演、教育講演、シンポジウムが企画されています。合同特別講演にはノーベル賞受賞者の野依良治先生をお招きし、「我が国が『科学技術立国』として生き続けるために」と題してお話しをしていただきます。合同シンポジウム1では「健康長寿社会をめざして—核医学の挑戦—」という本会のテーマに沿った発表と討論が行われます。合同シンポ2では「加速器を利用した放射性医薬品製造の進歩と未来—Mo 供給問題を踏まえて—」をテーマとしました。国際交流プログラムとしては、招待講演、keynote lecture、シンポジストとして多くの先生が海外から参加されます。今回はじめてPET 症例検討会を企画しました。東海地区で定期的に行われている検討会の拡大特別版という形式ですが、興味ある症例を一緒にご検討いただければ幸いです。日本核医学会に2015年度から看護師会員が設けられたこともあり、核医学看護フォーラムの企画もさらに充実しています。新たな試みとして、核医学が専門でない医療関係者、研修医・医学生にもご参加いただけるような「研修医・医学生のための放射線・核医学セミナー」も企画しました。多数の魅力ある一般演題の発表、討論と合わせて是非ご参加ください。

このような内容で学会を準備しているところですが、この原稿が「健康文化」に掲載されるころには、学会が無事(?) 終了してお世話になった方々と盛大にご苦労さん会が開催できることを楽しみにしています。

(国立長寿医療研究センター、第56回日本核医学会学術総会 会長)